〈論文〉

神話絵本「いなばのしろうさぎ」の再話にみる子どもが楽しむ絵本

落　合　美貴子

Mikiko Ochiai：A Picture Book for Children to Enjoy in the Retelling of the Mythological Picture Book "The White Hare of Inaba"

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要　第89号　抜刷

2024年7月

神話絵本「いなばのしろうさぎ」の再話にみる子どもが楽しむ絵本

落　合　美貴子[1]

Mikiko Ochiai：A Picture Book for Children to Enjoy in the Retelling of the Mythological Picture Book "The White Hare of Inaba"

再話による神話絵本「いなばのしろうさぎ」を，①登場人物や動物の特性が理解できる言葉，②人や動物，出来事との出会いによる変化，つまり物語の展開，③物語の展開によって起こる変容の視点で分析した．その結果，言葉の表現に違いはあるが，物語の展開やテーマは共通していた．また，難解な言葉があったにしても，読み聞かせによって幼児期の子どもの言葉の感覚が育まれると考えた．再話を繰り返されてきた神話絵本は幼児期の子どもが楽しめる絵本であり，大人による読み聞かせを通して神話を語ることは必要であることを明らかにした．

キーワード：神話絵本　再話　楽しい絵本

はじめに

絵本とは，子どもの言葉や感性，想像する楽しみを育むものとして認識されている．絵本によって育まれる子どもの想像力は，相手の気持ちや思いを理解する力につながり，子どもが将来，他者との関係性を築き生き抜く力となる．そのためには，家庭や保育現場における大人の読み聞かせという行為は，子どもにとって大きく影響を受けるものと考えられる．

そこで，日本最古の書物である「古事記」に収められた神話を再話した絵本は，子どもが楽しむための再話となっているのかを，初版年の違う特色のある神話絵本「いなばのしろうさぎ」を取り上げて読み解くことにした．そして，読み解く視点として，①登場人物や動物の特性が理解できる言葉，②人や動物，出来事との出会いによる変化，つまり物語の展開，③物語の展開によって起こる変容を掲げる．神話絵本「いなばのしろうさぎ」は，長年，様々な作者によって繰り返される再話ではあるが，その展開がその子どもの理解力や体験と一致し，喜びや面白さを実感する絵本であれば，子どもが楽しめることが期待できると考える．また，本研究で取り上げた「いなばのしろうさぎ」は，鳥取県の白兎海岸を舞台に展開される物語であり，鳥取県で過ごす就学前の子どもにとって，身近で親しみを感じ，楽しい絵本として，保育の現場において読み継いでいくために，再話された神話絵本の特徴を明らかにし，子どもが楽しめる絵本であることを考察する．

1．保育の中の絵本

平成 29（2017）年に改訂した幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」にある「(9) 言葉による伝え合いの部分」において，「先生や友達と心を通わせる中で，絵本や物語などに親しみながら，豊かな言葉や表現を身に付け，経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり，相手の話を注意して聞いたりし，言葉による伝え合いを楽しむようになる」[1)]とされ，幼児は絵本や物語などに親しみながら，豊かな言葉や表現を身に付けてい

1　鳥取短期大学幼児教育保育学科

くものであることを踏まえ，教師は，絵本や物語の世界に入り込むことで，豊かな言葉や表現にふれられるようにしたり，教師自身が豊かな表現を行い，伝えるモデルとしての役割を果たしたりすることで，幼児が様々な言葉に出会う機会をつくるなどの配慮を行うことの必要性を示している．

以上のことから，本研究では，鳥取県の白兎海岸を舞台に展開される物語である，神話絵本「いなばのしろうさぎ」を，鳥取県で過ごす就学前の子どもにとって，身近で親しみを感じ，楽しい絵本として，保育の現場において読み継いでいきたいと考え着目した．

2．再話とは

広辞苑では，再話について，昔話・伝説などを言い伝えられたままではなく，現代的な表現の話に作り上げること．また，その話のこと[2]．また，デジタル大辞泉では，昔話・伝説，世界の名作文学などを，子供向けにわかりやすく書き直したもの[3]．大辞林では，昔からの物語や伝説・民話などを，主として子供向きにわかりやすく書き直すことと説明している[4]．

つまり，再話を手掛けた児童文学者は，昔からの物語や伝説・民話にある難解な語句をわかりやすい語句に変えたり，残虐な場面を子ども向けに書き直したり，削除したりしている．更にはつじつまの合わない箇所に整合性をもたせるために書き直している．また，元の文法や時制に誤りがある場合，訂正したり，聞きやすくするために元の文から会話文へ変化（その逆）させたりすることと捉えられる．

そして，再話による作品は，自然とともに生きる生活の中から生まれたものであり，我々の暮らしに根付く日本の文化を絵本を通して子ども達に伝えることを目的としている．また，子ども達がわかってもわからなくても，物語にテーマがあり，人が生きていくために必要な心の在方といった（物事の善悪や道徳心など）本質的なものを見せることが大切という考えに基づくものである．幼児期の子どもにとって再話絵本は現代の物語絵本と同様に，保護者や保育者などの読み手を通してことあるごとに，絵本の「絵」や「ことば」，そして「ページをめくる」ことによる物語の展開に親しみ，楽しむことができる環境に置かれることで無意識のうちに，本質的なものが身につき，心に作用すると考えられる．

いずれにせよ絵本の再話は，昔からの物語や伝説・民話などを子ども向けにわかりやすく書き直したものである．

3．日本の神話「いなばのしろうさぎ」の再話

平成 20（2008）年の学習指導要領（国語）では，伝統的な文化に関する指導が重視され，1・2 年生向け教材の一つとして日本の神話が取り挙げられた．そこで，原田（2010）は，教材化された「いなばのしろうさぎ」に注目し，日本の神話を補助教材として扱う場合は，子どもに親しみやすく再話する必要性を述べながら，一方では，神話理解の妨げにもなることを明らかにしている[5]．また，小川（2021）は，改訂に伴い 4 社教科書に「いなばのしろうさぎ」が記載された内容と原典である「古事記」を比較し，神話教材の書き替えには，国語教育における神話の概念の曖昧さと神話を小学校 1・2 年生の教材にしたことで再話教材となり，神話性の削除は問題ではなく，動物譚・教訓譚として書き替えられていた作品価値が認められたことを明らかにしている[6]．

また，川俣（2020）では，小学校就学前の幼児期にふれる可能性の高い絵本において「いなばのしろうさぎ」がどのように再話されているのかを，原典と絵本 7 作品を取り上げて比較し特徴を明らかにしている．その中で，観点 1 登場人物の呼称と地名，観点 2 物語展開，観点 3 登場人物の個性や心理の起伏の 3 つから分析している[8]．

国語科における「いなばのしろうさぎ」の再話分析に関する先行研究を紹介したが，幼児期にふれあう絵本としての「いなばのしろうさぎ」の再話につ

いては分析がなされていなかった．そのため，本研究においては，保護者や保育者など大人による就学前の子どもを対象にした読み聞かせによって，子どもは楽しむことができると想定される絵本2冊『うみをわたったしろうさぎ』（再話：瀬田貞二　画：瀬川康男　1968年　福音館書）[9]，『いなばのしろうさぎ』（文：舟崎克彦　絵：赤羽末吉　1995年　あかね書房）[10]と学童期を対象とした児童自身が読者として一人で絵本を読むことによって楽しむことができる絵本1冊『いなばのしろうさぎ』（文・絵：いもとようこ　2010年　金の星社）[11]の3冊を取り上げ分析を行うこととした．

初版年の違う特色のある神話絵本「いなばのしろうさぎ」を取り上げ，内容に共通点や違いがあるかどうかを明らかにすることを目的とする．

4．研究の目的と分析方法

（1） 目的

本研究では，子どもの発達と成長を目的とし，長年，様々な作者によって再話を繰り返されてきた神話絵本の中で，表1に示した1968年から2010年にかけて出版された，絵本『いなばのしろうさぎ』（『うみをわたったしろうさぎ』）の3冊を分析対象とし，内容に共通点や違いがあるかどうかを明らかにしたうえで，神話絵本を幼児期の子どもが親しみ，楽しめるかどうかについて考察する．

（2） 分析方法

分析に際しては，幼児期の子どもを対象とする神話絵本のうち，初版年が異なり，違う絵本作家が，「古事記」の「因幡の白兎」を絵本として再話した「いなばのしろうさぎ」の中の特色のある3冊を限定した（表1）．

3冊の絵本の選定した理由は次の通りである．

① 「うみをわたったしろうさぎ」（再話：瀬田貞二　画：瀬川康男　1968年　福音館書店）

福音館書店より1956年に創刊された月刊雑誌，『こどものとも』に掲載された作品である．1956年幼稚園教育要領（文部省）の「言語」において，「(2) 望ましい経験」の一つとして「3絵本・紙しばい・劇・幻燈・映画などを楽しむ」と示されたことを受けて，同年に福音館書店発行の月刊雑誌『こどものとも』が創刊された．この月刊雑誌は，保育内容の補助教材を目的とし，一冊一話の方針を取り入れ，幼児の生活に根ざした創作物語を絵本の題材にし，教師も幼児も一緒にその世界を楽しみ，感動を共有できる絵本作りを目指すものであった．こうして，絵本「いなばのしろうさぎ」は始まり，月刊予約絵本『こどものとも』142号として『うみをわたったしろうさぎ』という題名で1968年に創刊されている．

また，再話を手掛けた瀬田貞二は，我が国の絵本研究の基盤を作った人物である．著書『瀬田貞二子どもの本評論集　絵本論』（1985・福音館書店）や『瀬田貞二子どもの本評論集　児童文学論』（2009・福音館書店）の中で，絵本製作を通して，新たな子どもの発見となり，その子どもたちに対して子どもの本のあるべき姿を追求し続ける養育者や保育者など，子どもを取り巻く大人たちの姿勢を示した．作品には，現在の保育の現場で読み継がれている『おだんごぱん』（1960・福音館書店）や『3びきのやぎのがらがらどん』（1965・福音館書店）等，創作や翻訳，昔話の再話に優れた作品を残した．

本研究では，再話者が日本の子どもの本の黎明期を支えた瀬田貞二であることと，当時の子ども観や教育観を反映した月刊絵本「こどものとも」（福音館書店）の刊行の中で手掛けられた経緯を受けて，この絵本『うみをわたったしろうさぎ』（1968・福音館書店）を取り上げた．

② 「いなばのしろうさぎ」（文：舟崎克彦　絵：赤羽末吉　1995年　あかね書房）

あかね書房より1995年に，日本の神話シリーズの第4巻『いなばのしろうざぎ』として，発刊した絵本である．この他にも舟崎克彦により再話された

『くにのはじまり』『あまのいわと』『やまたのおろち』『すさのおとおおくにぬし』『うみさち　やまさち』があり全6巻により古事記の世界を表現している.「しろうさぎ」は，白いうさぎではなく，素―素裸，つまりあかはだかのうさぎという捉え方をしたり，描写においては,「しろうさぎ」を野兎の夏毛である褐色で描いたりしている．このように現地取材と資料調査で考証され，古事記絵本の定型となるように制作されている.

また，再話を手掛けた舟崎克彦は「いなばのしろうさぎ」に下記のようなあとがきを添えている.

この本の「しろうさぎ」をご覧になって「あれ？」と思われた方も多いと存じます.「うさぎが白くないじゃないか」.

「いなばのしろうさぎ」は正しくは白いうさぎのことではなく，素―素裸，あかいはだかのうさぎという意味なのです.

考証をつくして古事記絵本の定型になるように，という主旨ではじめましたこのシリーズでは，その本意にのっとってしろうさぎを野兎の夏毛である褐色で描いています.［中略］

これが，堂々として語り伝えられて来た神々の物語の，何気ないひと言の中にふくまれる奥行きといったものを再考していただく一助になればと願うのです.[注1)]

つまり，この絵本では，物語冒頭の一文に「あらくれもので聞こえた須佐之男の命の子孫にもこよなく気立てのよい神がいた」とある．ここには，漢字にルビを振り，多くはひらがなで表記するといった配慮がなされている．また，①「うみをわたったしろうさぎ」や後述の③「いなばのしろうさぎ」とは異なり，全文をひらがなで表記する分かち書きをせずに，使用されている漢字も小学校4学年以降に学習するものが多く,「あらくれもの」「聞こえた」「こよなく」「気立てのよい」といった，学童期や乳幼児期の子どもには難解となる表記がなされている.

つまり，再話とは「難解な語句をわかりやすい語句に変えたりすること」と述べたが，この絵本②に関しては，わかりやすい語句に変換するといった乳幼児期や学童期への配慮はされていない．このことから，特色のある神話絵本と捉え選定した.

③「いなばのしろうさぎ」（文・絵：いもとようこ　2010年　金の星社）

絵本作家いもとようこの日本むかしばなしBセット全12巻のうちの一冊である．作者は昔話を通して,「欲をかいていてはいけない」「悪いことをすれば必ず自分に返ってくる」など，人として大切なことを伝えることの必要性を感じている.そして，地域や語り継ぐ人や時代など，子どもを取り巻く環境が少しずつ変化しつつも，絵本の中に教育的意義を位置づけ絵本を制作している.

再話を手掛けた，いもとようこは，日本むかしばなしシリーズとして再話絵本を刊行している．民俗学者の柳田國男は，『口承文芸史考』[注2)]において下記のように昔話を定義している.

われわれが，ハナシといっているもののうちで，「昔々ある処に」という類の文句をもって始まり，話の区切りことに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を付して,それが又聴きであることを示し，最後に一定の今は無意識に近い言葉をもって，話の終わりを明らかにしたもの，この形式を具備したのが日本では，昔話，西洋の人たちは民間説話とでも訳すべき語をもって呼んでいる特殊の文芸である.この文芸は口と耳とをもって世に流布していた.[注2)]

つまり，昔話は「むかしむかし，あるところに，……が住んでおった」という定型句で始まり，時間や空間，登場者が紹介されるとすぐに物語が動的に進む．だが，この再話絵本には，伝聞の言葉となる「トサ・ゲナ……」が使われておらず，他者から聞いた話であると言い添えた語りは見られない.また，文末も「めでたしめでたし」といった決まり文句で

話は終わりと宣言する言葉がないとすれば，この絵本は，創作絵本と捉えることもできるのではないかと考えられる．

しかし，そもそも再話絵本は，作者が子どもにわかりやすく，より「絵」と「ことば」を通して，絵本に親しみ，楽しむために製作された書物となれば，本研究の分析対象にあえて取り上げる．

このように，古典文学古事記にある「因幡の白兎」は，様々な出版社や作者によって，今日まで再話を繰り返されている絵本である．

また，神話絵本を分析するにあたり，次のように考えた．幼児期の子どもは大人の読み聞かせを介して，絵本に興味・関心をもち，物語の展開を理解することによって，絵本を楽しむことにつながる．そこで，幼児期の子どもにとって楽しさを感じる絵本とは，物語の展開が理解でき，絵本の世界に入り込み，時には表現活動へとつながるような絵本であると考える．つまり，子どもにとって楽しい絵本とは，まず物語の展開を理解することであると捉えられる．そこで，川俣（2020）の日本神話「いなばのしろうさぎ」の絵本を対照比較し，再話作品としての特徴を明らかにする中で，登場人物の個性や心理の起伏の視点を援用した．本研究の分析では，①登場人物や動物の特性が理解できる言葉，②人や動物，出来事との出会いによる変化，つまり物語の展開，③物語の展開によって起こる変容の３つの視点から分析を行うことで，子ども向けにわかりやすく書き直したものであるかどうかを考察する．そして，子どもが自分自身の体験と同化させることでより絵本の世界に入り込み楽しさを感じる．これは，子どもが「ひと・もの・こと」との出会いによって，内面の変化に気づき成長に喜びを感じる体験と捉える．

５．結果

分析の結果，共通点として，話の展開は初版年の異なる絵本であっても同じであった．差異としては下記の３点が見出された．

（１） 登場人物・動物の特性を示す言葉

どの年代に発刊された絵本にも共通して登場する人物・動物「大国主命」「白兎」に注目し，特性を示す言葉を抽出した．

大国主命については，繰り返し優しいと形容しつつ，慈悲深さと公明さが伝わる．また，絵本①「にもつをはこぶおとも」絵本③「おおきなふくろをかついだ」といった記述にあるように，八十神（兄弟）たちから荷物を背負わされ，重い足取りで従う姿から，辛抱強さがわかった．また，八十神（兄弟）たちから荷物を背負わされている状況について，絵本①では「にもつをはこぶおとも」，絵本②では「荷を背負わされる」「重い足どりでしたがう」，絵本③では「おおきなふくろをかついだ」とあり，子どもが八十神（兄弟）たちから荷物を背負わされ，重い足取りで従う姿を想像しやすいのは，絵本②であり，絵本①③の表現よりも絵本②の表現が，より大国主命の辛抱強さが伝わることがわかる．

また，絵本①「どうしてないているのだね」と泣いている理由を尋ね，「やさしくうさぎにおしえた」といった記述から，白兎の過ちを責めることはせず

表１　対象作品

	書　　名	作者・画（絵）	初版年	出版社
①	『うみをわたったしろうさぎ』	再話：瀬田貞二 画：瀬川康男	1968 年	福音館書店
②	『いなばのしろうざぎ』	文：舟崎克彦 絵：赤羽末吉	1995 年	あかね書房
③	『いなばのしろうざぎ』	文：いもとようこ 絵：いもとようこ	2010 年	金の星社

に，白兎の願いを受け入れ，元の姿に戻れる方法を教えている．また絵本②の中でも「おや，うさぎ．どうしたのだ」「おだやかなこえでたずねた」，そして「なんとむごいことだ」と辛い目に遭った白兎の気持ちに共感し，元の姿に戻れる方法を教えている．しかし，絵本③では，白兎の境遇を理解したうえで，「これからは，うそをついてはいけないよ　わるいことをすれば，かならずじぶんにかえってくるからね」といった白兎を諭す言葉があり，白兎の犯した過ちを過ちのままで終わらせないための教育的視点を示している．

絵本①②③の繰り返される再話では，大国主命の人格を示すことば（形容詞）を見てみると，絵本①では「すぐれた」「やさしい」とあり，絵本②では「気立てのよい」「おだやか」といった，幼児期の子どもが理解するには難しい言葉が使われている．絵本③では「こころのやさしいかみさまでした」の記述の後の言葉に，「かわいそうに」といった，大国主命の感情を言葉にした会話文が使われている．

白兎については，絵本①では「おしえにしたがって」「おしえられたとおりに」，絵本②では「ことばにしたがう」，絵本③では「いわれたとおり」といった記述から，相手の話を聞き入れる白兎の素直さが伝わってくる．しかし，絵本①では「『ほい，うまくだましたぞ』ついくちをすべらせてしまいました」，絵本②では「やいやい，だまされたな．わたしは海をわたりたかっただけなのさ」絵本③では「おおわらいをしながら『あっはっはっは……さめくんのおばかさん！かずくらべなんてうそだよ！』」といった記述から，思い上がった様子が描かれている．しかし，絵本①では「ふしおがんで」，絵本②では「たいそうよろこぶ」，絵本③では「『ありがとうございました』とふかくおじぎをして，『はい，やくそくします』うさぎはこころからはんせいしました」といった記述から，自分の過ちに気づき，深い反省とともに改心することのできる素直な人物像が見て取れた（表2）．

（2）　人や動物，出来事との出会いによる変化（物語の展開）

分析②の視点から絵本を精読した結果，大国主命と白兎が出会う場面がそれに該当した．その理由は，大国主命と白兎が出会う場面で，絵本①では「おおくにぬしに　たずねられて，うさぎは　つぎのような　みのうえばなしを　ものがたりました―」，絵本②では大国主命に「命は足をとめ　おだやかな声でたずねた」「じつは……（省略）」と「うさぎは，あえぐ息の下からはなしはじめました」，絵本③では，絵本①②のように，白兎が今までの経緯を大国主命に伝える記述はなかった．しかし，「いわれたとおり」といった記述があり，白兎が大国主命の教えを素直に受け入れる謙虚さが見て取れた．

また，絵本①・②・③の中にある，大国主命と白兎が出会う場面から，絵本①では「やさしくうさぎにおしえた」，「では，このかわが　うみに　そそぐところに　いって，まず　まみずで　からだを　あらいきよめなさい．それから　あたりの　がまのはなの　かふんを　あつめて，じめんにまいて　ねころがるとよい．そうすれば　きっと　もとの　からだに　もどるだろう」，絵本②では「まっさきに河口へ行って真水で塩をあらいおとし，蒲の花粉をしきちらした上にころがりなさい」，絵本③では「かわの　みずで　からだを　あらうんだ．そして，がまのほわたに　くるまりなさい．そうすれば，きっともとどおりになるよ」と，大国主命は，白兎が元の姿に戻る方法を丁寧に教えている．そこには，絵本②の（うさぎの話を聞き）「なんとむごいことだ」，絵本③の「かわいそうに．よくおきき．」「もとどおりになるよ」の記述から，大国主命は，兄弟から辛い目に遭わされている自分の姿と白兎の姿を重ね合わせている．そして，白兎の気持ちに共感し，白兎に助かる方法を教えている（表3）．

（3）　物語の展開によって起こる変容

分析③の視点から絵本を精読した結果，白兎が変容する場面がそれに該当した．登場する白兎は，さ

表２　登場人物・動物の特性を示す言葉

書　　籍	特性を示す言葉
絵本① 『うみをわたった しろうさぎ』	【大国主命】 すぐれたかみ／こころやさしい／にもつをはこぶおとも／「どうしてないているのだね」／やさしくうさぎにおしえました／「では，このかわが　うみに　そそぐところに　いって，まず　まみずで　からだを　あらいきよめなさい．それからあたりの　がまのはなの　かふんを　あつめて，じめんにまいて　ねころがるとよい．そうすれば　きっと　もとの　からだに　もどるだろう」 【白兎】 あわれな／おしえにしたがって／ないていますと／みのうえばなしをものがたりました／もとのくにかえりたくてたまらなくなりました／いろいろかんがえたすえに／わにをだましてうみをわたろうとかんがえました／「ほい，うまくだましたぞ」ついくちをすべらせてしまいました／おしえられたとおりに／ふしおがんで
絵本② 『いなばのしろうざぎ』	【大国主命】 こよなく気立てのよい／兄弟たちの荷を背負わされる／重い足どりでしたがう／「おや，うさぎ．どうしたのだ」／おだやかな声でたずねた／「なんとむごいことだ」／まゆをひそめた／「まっさきに河口へ行って真水で塩をあらいおとし，蒲の花粉をしきちらした上にころがりなさい」 【白兎】 泣きふせっていた／まにうけた／いわれるがままにしてみた／さめたちをたぶらかして／うれしさのあまり口走り／「やいやい，だまされたな．わたしは海をわたりたかっただけなのさ」 みことのことばにしたがうとたいそうよろこぶ
絵本③ 『いなばのしろうざぎ』	【大國主命】 おおきなふくろをかついだ／こころのやさしい／「かわいそうに」 やさしくいいました／「これからは，うそをついてはいけないよ　わるいことをすれば，かならずじぶんにかえってくるからね」 【白兎】 まいにちかんがえていた／いいことをおもいつきました／おおわらいをしながら「あっはっはっは……，さめくんのおばかさん！かずくらべなんてうそだよ！」／うさぎはいわれたとおり／「ありがとうございました」／ふかくおじぎをして／「はい，やくそくします」／こころからはんせいしました

め（わに）との会話の中で，絵本①②ではさめ（わに）のことを「おまえ」，絵本③では「きみ」と呼びさめ(わに)を自分より下に見ていることがわかった．また，絵本①では「かぞえてやろう」，絵本②では「かぞえてやるとしよう」，絵本③では「かぞえてあげるよ」といった記述からも見取ることができた．さめ（わに）を騙すことに成功したと実感した白兎は，絵本①では「ほい　うまくだましたぞ」，絵本②では「やいやい，だまされたな」，絵本③では「あっはっは……，さめくんの　おばかさん！　かずくらべなんてうそだよ！」と記述されていることからも，白兎の思い上がった様子がわかった．

しかし，大国主命と出会い，窮地に追い込まれた白兎は，さめ（わに）を騙してもとの国に帰ろうとした自分の過ちを認める．また，白兎は元の姿に戻る方法を，絵本①では「おしえられたとおりに」，絵本②では「みことのことばにしたがう」，絵本③では「いわれたとおり」の記述から，大国主命から聞き，それを素直に受け入れる．すると，痛みはおさまり，白い毛が生え，元の白兎になることが共通して書かれている．白兎が窮地に追い込まれた経緯には，白兎とさめ（わに）とのやりとりや白兎と絵

表３　大国主命と白兎が出会う場面

書　　籍	場　　面
絵本① 『うみをわたった しろうさぎ』	*そして，うみで　ないでいますと，いちばんあとから　ついてきた　おおくにぬしが　とおりかかりました.「うさぎよ，どうして　ないているのだね」おおくにぬしに　たずねられて，うさぎは　つぎのようなみのうえばなしを　ものがたりました―* （元の姿に戻る方法を）*やさしくうさぎにおしえた*
絵本② 『いなばのしろうざぎ』	（うさぎは）*ひびわれがはしり　からだがひきちぎられるような　くるしみである　そこへ，おくれた大国主が　とおりかかった「おや，うさぎ．どうしたのだ」命は足をとめ　おだやかな声でたずねた.「じつは……（省略）」うさぎは，あえぐ息の下からはなしはじめました.* （うさぎの話を聞き）*「なんとむごいことだ」まゆをひそめた /「まっさきに河口へ行って真水で塩をあらいおとし，蒲の花粉をしきちらした上にころがりなさい」*
絵本③ 『いなばのしろうざぎ』	*うさぎは　とうとう　うごけなくなりました　そこへ，おおきな　ふくろを　かついだ「おおくにぬしのみこと」というかみさまが　とおりかかりました.* *このかみさまは，こころの　やさしい　かみさまでした.「かわいそうに．うさぎくん，よくおきき.* *かわの　みずで　からだを　あらうんだ．そして，がまの　ほわたに　くるまりなさい．そうすれば，きっともとどおりになるよ」おおくにぬしのみことは，やさしく　うさぎに　いいました.*

本①「あにがみたち」，絵本②「八十神」，絵本③「いじわるな　かみさま」と記述されている大国主命の兄弟とのやりとりに見られる，相手を騙し騙される行為を白兎は経験している．絵本③では，大国主命の言葉に「これからは，うそを　ついては　いけないよ．わるいことをすれば，かならず　じぶんにかえってくるからね」と明確に白兎への教えを示されている．その結果，自分の過ちに気づいたことをきっかけに，嘘をついたら，必ず自分に返ってくる．これからは嘘をつかないと心に決め，こころから反省する姿につながっている．また，絵本①では「あなたの　あにがみたちは，やがみひめを　よめにもらえないでしょう．ふくろを　しょっていても，ひめは　あなたを　えらびますとも」，絵本②では「あなたさまは今でこそ　いやしいもののようにひとの荷物を　背負わされておられますが　八上姫さまを嫁にされるのは　ご兄弟ではございません．だれであろう　あなたさまなのでございます」と白兎が大国主の命が幸せになることを予言している．しかし，絵本③では「『ありがとうございました』うさぎは　ふかく　おじぎをして，いいました」「『はい，やくそくします』うさぎはこころから　はんせいしました」の記述があり，大事なことに気づかせてくれた，大国主命に心から感謝する白兎の姿が表現されている（表4）．

６．考察と今後の課題

川俣（2020）によると，原典と初版年や再話者の異なる絵本である７作品を取り上げて比較し特徴を明らかにしている．そこでは，言葉の表現にそれぞれ特徴はあるが，原典と同様，白兎が鰐（さめ）を騙して並ばせて，その背中を跳んで海を越え，於岐の島から因幡の国の気多の岬に渡ろうとする．ところが，騙されたとわかった鰐（さめ）の怒りをかい，白兎は毛皮をむしられてしまう．その白兎が，大国主命に助けられるといった物語の内容は共通していた．また，この神話のテーマとなっている，良い行いをすればよい結果が，悪い行いをすれば悪い結果がでるといった教育的側面の意味も共通していた．

表4　白兎が変容する場面

書　　籍	変容する場面
絵本① 『うみをわたった しろうさぎ』	【さめ（わに）との会話】 *「わによ　わによ，わたしたち　うさぎのなかまと，おまえたち　わにのなかまと，どちらが　おおいか　くらべてみようじゃないか．おまえは　なかまぜんぶつれてきて，ここから　むこうの　けたのみさきまで，ずらりと　ならんでみてごらん．わたしが　そのうえを，ひとつひとつ，はしりわたってかぞえてやろう．そうすれば，どっちのなかまがおおいか　わかるというものさ」/「ほい　うまくだましたぞ」と，つい　くちを，すべらせてしまいました．* 【大國命と出会った後】 *おいおいとこえをあげてなきました / おしえられたとおりに / ふしおがんで*
絵本② 『いなばのしろうざぎ』	【さめ（わに）との会話】 *「おうい，わたしたちうさぎのかずと　おまえたちさめのかずの　どちらがおおいか，　くらべてみないか」/「ではまず，おまえたちのかずから　さきにかぞえてやるとしよう」/「この浜から気多のみさきにかけて一れつにならんでみるがよい．わたしはおまえたちの背中をとびながらかずをかぞえてやろう　では，いくぞ」/「やいやい，だまされたな．わたしは　海をわたりたかっただけなのさ」* 【大國主命と出会った後】 *やそがみさまのおっしゃることをしんじたばかりに / みことのことばにしたがうとたいそうよろこぶ*
絵本③ 『いなばのしろうざぎ』	【さめ（わに）との会話】 *「ねえ，さめくん，きみたちの　なかまと　ぼくたちの　なかま，どちらが　おおいかくらべっこしないかい？」「じゃ，さめくん，きみは　なかまを　あつめてきておくれ！」/「さめくんたち，こちらの　きしから　あちらのきしまで，いちれつにならんでおくれ．そうしたら，ぼくが　きみたちのせなかのうえを　わたりながら，かずを　かぞえてあげるよ」/「あっはっは……，さめくんの　おばかさん！　かずくらべなんてうそだよ！　ぼくは　こちらの　しまへ　わたりたかっただけさ！」* 【大國主命と出会った後】 *ないていると / いったとおり / いわれたとおり /「ありがとうございました」/ ふかくおじぎをして /「はい，やくそくします」/ こころからはんせいしました*

これは，本研究においても同様の結果が見出された．

また，幼児期の子どもが，「絵」と「ことば」を通して物語の展開を理解し，絵本に親しみ，楽しむために製作された書物である再話絵本にふれるのは，身近な大人である保護者や保育者による読み聞かせによることが多い．読み聞かせの場面を想定して考えると，保護者や保育者が，あえて神話絵本を読み聞かせることによって，幼児期の子どもは，生まれ育った地域に伝わる物語を知る機会となり，今までにふれることのなかった新たな物語の世界へと一歩踏み入れることになる．そして，再話された神話絵本は，舟崎克彦が再話した絵本『いなばのしろうさぎ』のように，わかりやすい語句に変換するといった幼児期の子どもへの配慮もなされず，難解な言葉はあったとしても，読み手となる大人と聞き手となる幼児期の子どもとの間に，言葉のやり取りや場の共有などを通して，ふれあいを体験し，ことばに対することばのもつ音やリズムといった感覚を育むことにもつながる．このことから，再話を繰り返されてきた神話絵本は幼児期の子どもが楽しめる絵本であり，幼児期の子どもを取り巻く保護者や保育者が読み聞かせを通して神話を語ることは必要だと考えた．

今後の課題としては，今回は神話絵本「いなばの

しろうさぎ」の３冊を分析して得た結果であるため限定的であり，今後，他の神話の再話絵本でも検討する必要がある．また，就学前の子どもを対象に，神話絵本「いなばのしろうさぎ」の読み聞かせの実践を実施し，つぶやきや表情やしぐさ，動きから，物語の世界を楽しんでいるのかを検証していく必要がある．

注

１）舟崎克彦『いなばのしろうさぎ』，あかね書房，1995.

２）柳田國男『口承文芸史考』，講談社，1976，p. 96.

引用・参考文献

１）文部科学省『幼稚園教育要領』，第１章総則，第2，2017.

２）『広辞苑第七版』，岩波書店，2018.

３）『デジタル大辞泉第二版』，小学館，2023.

４）『大辞林第三版』，三省堂，2006.

５）原田留美「日本の神話を補助教材としての扱う場合の問題点について―「いなばのしろうさぎ」の場合―」，『新潟青陵学会誌』第３巻第１号（2010），pp. 21-31.

６）小川雅子「小学校国語教科書における神話教材の書き替えをめぐる問題―「いなばのしろうさぎ」を中心に―」，『山形大学紀要（教育科学）』第17巻第４号（2021），pp. 25-46.

７）川俣沙織「小学校国語科教科書における日本神話について」，『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第10号（2019），pp. 25-37.

８）川俣沙織「日本神話「いなばのしろうさぎ」を題材とした絵本の対照比較」，『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第11号（2020），pp. 1-12.

９）瀬田貞二『うみをわたったしろうさぎ』，福音館書店，1968.

10）舟崎克彦『いなばのしろうさぎ』，あかね書房，1995.

11）いもとようこ『いなばのしろうさぎ』，金の星社，2010.

12）中川素子他『絵本の事典』，朝倉書店，2012.